関西大学『社会学部紀要』第32巻第3号，2001，pp.87－117　　ISSN 0287－6817

ボランティア経験がボランティアに対する態度に及ぼす影響
――活動半年後と5年後のボランティア態度の比較――

高木　修・玉木　和歌子

The effects of volunteer work upon the attitude toward volunteering: A comparison of volunteering attitudes after 6 and 60 months.

Osamu TAKAGI & Wakako TAMAKI

Abstract

In 1996, Takagi and Tamaki focused on the performed volunteer work through volunteering organization, five months after the Great Hanshin-Awaji earthquake, and disclosed the effect in which how the volunteering experience affected the attitudes toward over all volunteering and volunteering motivation.

In this study, the purpose was to clarify how the affective process changed five years after the initial volunteer work at the earthquake. Subjects were 181 rescue volunteers and 123 affiliated volunteers, a total of 304, who were also the subjects for the study in 1996 (Takagi and Tamaki).

As a result, the effect in which direct evaluation based on emotions such as contentment regarding volunteer work influences attitudes toward over all volunteering and volunteering motivation was found to be weaker than the data taken five months after the earthquake. On the contrary, it was unveiled that rational appraisal on the benefits and investment for involving the activity (e.g., reward through the activity, involved costs, expectation from the surroundings) influenced the attitudes and motivation of five years after the earthquake.

Key words : the Great Hanshin-Awaji Earthquake, volunteer, volunteer work, volunteer organization, volunteering attitude, helping behavior

抄　録

高木・玉木（1996）は、阪神・淡路大地震から約半年が経過した時点でボランティア団体を通じて活動したボランティアに焦点をあて、その経験がボランティア全般への態度や意欲にどのような影響を及ぼしているかを明らかにした。

本研究では、ボランティア活動から5年が経った時点で、その影響過程がどのように変遷しているかを明らかにすることを目的とした。調査対象者は、高木・玉木（1996）で調査対象者となった救援ボランティア181名と会員ボランティア123名の合計304名である。

調査の結果、ボランティア活動についての満足感等の感情に基づく直接的評価がボランティア全般への態度や意欲に及ぼす影響は、半年後のそれより弱まっていた。逆に、活動を通して得られる報酬、活動にかかるコスト、周囲からの期待などの参加に伴う利得・出費の分析という合理的認知判断が5年後の態度や意欲に影響していることが明らかになった。

キーワード：阪神・淡路大地震、ボランティア、ボランティア活動、ボランティア団体、ボランティア態度、援助行動

この研究は、文部省科学研究費・基盤研究(C)地震危機管理システムの日米中比較分析（代表者、山川雄巳）の一環として行われた。

■問題

災害に遭遇することは、我々にとって大きな出来事である。実際に自分が被害に遭わずとも、その様子を目撃したり、重要な他者が被害に遭うことを通じてその災害と直面することは、我々に大きな影響をもたらす。災害においてボランティア活動に携わった人たちにも何らかのインパクトを与えており、その影響は、時間が経っても、なお残ると考えられる。

高木・玉木（1996）は、「災害時における援助活動の参加からその影響の出現に至るまでの過程」を想定し、そのモデルに沿った援助行動の影響過程を検討している。それは、阪神・淡路大震災から6カ月後の1995年10月から12月に渡る調査で、支援活動を行ったボランティア団体に焦点をあて、災害における活動が災害ボランティアのみならず、ボランティア全般に対する態度や意欲、そしてボランティア観にどのような影響を及ぼしているかを明らかにした。たとえば、活動への満足感がボランティア観を肯定的な方向に活性化させることが認められた。また、ボランティア経験の豊富な人ほど、そのポジティブな効果が顕著であり、しかもそれはボランティア団体に災害前から所属している会員ボランティアにおいて主として認められた。

高木（1997）は、「援助行動の生起過程に関するモデルの提案」の中で、援助に成功するなど好ましい経験をした場合、援助行動全般に対してもポジティブな影響が現れ、援助行動が以後起こりやすくなると仮説している。つまり、ボランティア経験が豊富であり、自己のボランティア活動に好印象を抱いている人ほど、ボランティア活動に参加しやすいということである。高木・玉木（1996）においては、会員ボランティアが一層ポジティブな影響を受けており、このことはそのモデルと合致している。

ところで、工藤・杉本（1998）は、「世論調査リポート」の中で、阪神・淡路大震災，日本海重油流出事故という大災害を経て国民がボランティアについてどのように考えるようになっているかを探るために、1997年11月に全国の16歳以上の国民1,173名を対象にアンケート調査を行なっている。それによると、災害ボランティアは、国民に非常な好感をもって受けとられており、「高く評価する（81%）」と「ある程度評価する（17%）」を合わせると、98%に達する人が肯定的に評価していた。また、ボランティアの有用性についても、「おおいに、役に立っている（34%）」と「ある程度、役に立っている（56%）」を合わせると、90%に達する人が役立つと認めており、災害ボランティアの活動が国民のボランティア観に対してポジティブに作用していることが示された。しかし、今後ボランティア活動をより活発にするためには、何が必要かという質問に対して、「気軽にボランテ

ィア活動に参加できるきっかけづくり」が61.6%と多数を占め、次いで「行政・企業・ボランティア団体の協力関係の強化（43.1%）」や「ボランティアに関する情報の充実(41.1%)」が続いており、国民が求めるボランティア活動は非日常的な災害ボランティアではなく、日常的な、地域に根づいたボランティア活動であることが示唆された。

また、神戸新聞（2000, http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/99sien/toku1.htm）は、1999年12月の時点で神戸・大阪の47のボランティア団体を対象に実態調査を行っている。それによると、震災関連の活動に取り組んでいる団体は、震災直後で85%だったのに比して、この調査時点では38%と減少していた。また、活動団体の多くが震災直後と較べて、人手不足に悩んでいた。今後の活動方針として、「震災被災者支援」と回答したのが２団体、「震災関連以外の活動との両立」が４団体と、震災関連の活動が減少する傾向にあり、逆に、「震災関連以外のボランティアを中心に」と回答したのが27団体と全体の70%を超えていた。「震災ボランティア」としての活動以外の活動が必要とされるようになっていることが認められた。

以上のように、年月を経てボランティア環境や国民の意識が様変わりしている。では、実際震災当時に活動していたボランティアにおいても、現在、その震災のショックが薄れ、災害ボランティア活動経験の影響が変化しているのであろうか。その実態を縦断的な調査で明らかにすることが必要である。

■目的

本研究の目的は、以下の２点である。

高木・玉木（1996）において被調査者となった京都YMCAの「会員ボランティア」と阪神・淡路大震災発生後に、京都YMCAに氏名，連絡先を登録して活動意向を示し、支援活動に実際参加した「救援ボランティア」とを対象に、

1．会員ボランティアか救援ボランティアかというボランティアタイプの違いによって、災害ボランティア活動の評価や影響がどのように異なるかを、明らかにする。
2．災害時のボランティア活動の経験が、半年後や５年後のボランティア意識・態度にどのような影響を与えているのかを、「災害時における援助活動の参加からその影響の出現に至るまでの過程」モデル（高木・玉木，1996）に沿って、明らかにする。

■方法

1．被調査者：高木・玉木（1996）において被調査者となった上記の救援ボランティア

の内の371名と、京都YMCAの1999年度の会員197名の合計568名を調査対象とした。

2．調査期間：2000年2月15日～5月9日

3．調査方法：質問紙による郵送調査法で調査を実施した（3月23日督促状発送）。回収調査票数は、救援ボランティアが181票、会員ボランティアが123票の合計304票であり、回収率はそれぞれ48.8.%，62.4%であった。

4．調査項目：質問紙は、高木・玉木（1996）とほぼ同じ構成にした。しかし、調査項目が繁多になることが予想されたので、被調査者の負担を配慮し、極力必要な項目のみを残こした。

1）フェイス項目（性別、年齢、職業）

2）地震体験　3件法

3）地震被害　3件法

4）被災知人の有無　2件法

5）ボランティア活動経験度　3件法

6）活動参加動機　高木・玉木（1996）の23項目　5件法

7）援助有効性評定　5件法

8）活動目標実現度　5件法

9）援助効果度　5件法

10）物理的コスト認知　5件法

11）精神的コスト認知　5件法

12）活動当時における活動満足度　5件法

13）5年後における活動満足度　5件法

14）援助成果　2項目　5件法

15）活動成果出逢い　2項目　5件法

16）活動問題認識　2項目　5件法

17）活動参加態度　5件法

18）活動全般に関する参加成果認知　5件法

19）周りの活動参加期待度　5件法

20）活動参加における効力感　5件法

21）活動参加道徳意識度　5件法

22）活動有意義性　5件法

23）活動参加による態度変化度　5件法

24）活動関心度　５件法

25）活動意欲度　４件法

26）活動実態　２件法

27）余暇割当度　３項目（ボランティア、自宅休養、レクリエーション）　５件法

■結果と考察

１．基礎統計

１）調査回答者の特性

①性別

調査回答者の性別構成比は、表１に示した。

表１．調査回答者の性別構成（人数、割合）

	男性	女性	不明	合計
全体	159	140	2	304
%	52.3	46.1	0.6	100.0
救援	48	133	0	181
%	26.5	73.5	0.0	100.0
会員	112	9	2	123
%	91.1	7.3	1.6	100.0

高木・玉木（1996）においては、救援ボランティアが男性34.2%、女性64.6%であり、会員ボランティアが男性89.6%、女性8.3%であった。今回の調査では、男女比が少し極化しているようであり、会員ボランティアでは男性が多く、救援ボランティアでは女性が多いという特徴が見える。

②年齢層

表２のように、年齢層においても、ボランティアタイプによる特徴が見える。救援ボランティアは比較的若く、会員ボランティアは比較的、熟年層が多数を占めている。この違いは、高木・玉木（1996）においても認められた。

表２．調査回答者の年齢層（人数、割合）

	20代	30代	40代	50代	60代	70以上	不明	合計
全体	41	26	38	81	26	6	1	304
%	13.5	8.3	12.5	26.6	8.6	2.0	0.3	100.0
救援	41	23	12	26	4	0	0	181
%	22.7	12.7	6.6	14.4	2.2	0.0	0.0	100.0
会員	0	3	26	55	22	6	2	123
%	0.0	2.4	21.1	44.7	17.9	4.9	1.6	100.0

2．会員ボランティアと救援ボランティアの差異（t検定およびχ^2検定結果）

会員ボランティアと救援ボランティアとでは、どのような違いがあるのかを明らかにするために、援助活動の経過における動機項目，援助活動評価過程における各項目，援助影響過程における各項目について、対応のないt検定を行った。また、5年後の時点におけるボランティア活動参加がボランティアタイプによりどのように相違するかを見るためにχ^2検定を行った。

1）援助活動の経過

①援助活動への参加動機

23項目の活動参加動機については、高木・玉木（1996）の構造に従い、その因子毎に会員ボランティアと救援ボランティアの差異を、t検定で確かめた。その結果、ボランティアタイプの違いで動機得点に有意差が認められたのは、3つの動機においてであった。表3に、その結果を示す。

5％水準で有意差が認められた動機は、「好ましい援助，被援助経験」動機である。つまり、会員ボランティアでは、援助経験に好ましい印象が抱かれ、その経験が援助への動機づけを高めている。なお、10％水準で傾向差が認められた動機は、「共感と愛他的性格による責任の受容」動機と「援助要請の応諾」動機である。すなわち、会員ボランティアは、自分のことを援助に積極的な愛他的性格の持ち主と自己知覚しており、所属団体の要請があると、それに応じる形で援助を行うことが、救援ボランティアよりも多いという傾向である。

表3．ボランティアタイプによる援助動機の差異（t検定結果）

変数名	会員ボランティア（SD）		救援ボランティア（SD）		df	t
動機①	22.22	(4.59)	21.19	(5.76)	294	1.73†
動機②	7.44	(2.90)	5.25	(2.71)	302	6.70***
動機⑤	6.47	(2.67)	5.87	(2.76)	302	1.88†

注1）数値は、平均値と標準偏差
注2）有意水準は、† p<.10, *** p<.001
注3）動機①は、「共感と愛他的性格に基づく責任の受容」動機
動機②は、「好ましい援助，被援助経験」動機
動機⑤は、「援助要請の応諾」動機

②自己の援助の有効性推定

援助がどれだけ効果を上げると思っていたか、つまり自己の援助の有効性評定について、

会員ボランティアと救援ボランティアで差異があるかどうかを、ｔ検定で確かめた。

その結果、会員ボランティア（m=3.83, SD=0.743）は、救援ボランティア（m=3.54, SD=0.868）よりも、自分の援助を有効であると評価していることが明らかとなった（t(266)=2.83, p<.01）。

２）援助活動の評価

自己の援助活動をどのように評価しているかに関する各項目における、ボランティアタイプによる差異を、ｔ検定で確かめた。表４にその結果を示す。

ボランティアタイプでその活動評価に差異が認められたのは、援助が被災者に役立っていると感じていたかどうかを測る「援助効果度」、したいと思っていたことが十分にできていると感じていたかどうかを測る「活動目標実現度」、活動をするために払った「物理的コスト」と「精神的コスト」、そして、活動当時に自分の活動に満足していたかどうかを測る「活動当時における活動満足度」の５項目であり、これらの項目は援助活動評価として設定した全項目である。

表４．ボランティアタイプによる援助活動評価の差異（ｔ検定結果）

変数名	会員ボランティア（SD）		救援ボランティア（SD）		df	t
援助効果度	3.84	(0.791)	3.44	(0.943)	252	3.72***
実現度	3.15	(1.110)	2.61	(1.192)	265	3.77***
物理的コスト	2.70	(1.249)	2.16	(1.065)	198	3.57***
精神的コスト	2.14	(1.028)	1.89	(0.990)	262	2.02*
当時の満足度	3.02	(1.095)	2.57	(1.071)	265	3.36***

注１）数値は、平均値と標準偏差
注２）有意水準は、* p<.05, *** p<.001

表４によると、会員ボランティアは、救援ボランティアよりも、精神的にも物理的にも負担を感じながら活動を続けていたが、それでも自己の活動についてポジティブな印象を抱き、満足を得ていたことが分かる。なお、これには、彼らが実際に効果のある活動を行っていたこともあろうが、投資の量と認知とを一致させるという内的整合化の過程が働いていることも推定される。

３）援助活動経験の評価

援助活動経験をどのように評価しているかに関する各項目における、ボランティアタイプによる差異を、ｔ検定で確かめた。その結果、５％水準未満で有意差があった項目は、

活動より5年後の現在における活動の満足度を測る「5年後満足度」，援助成果3項目のうちの「被災者にとって役立つことができた」という援助成果①と「自分自身を評価することができた」という援助成果②の2項目，援助成果出逢いの2項目のうちの「他のボランティアと良く交流できた」という援助出逢い①，そして、援助成果3項目と援助出逢い2項目を単純加算した「援助成果合計」の5項目であった。検定結果を表5に示す。

会員ボランティアは、救援ボランティアよりも、その当時だけではなく（表4参照)、5年後においても、活動について満足感を強く抱いており、当時の活動を通じて自分に何らかの成果があり、活動を通じて他のボランティアともよく交流できたと強く認識していた。また、援助成果を全般的に高く認識していることも示された。これらのことから、会員ボランティアが、救援ボランティアよりも、援助活動経験をポジティブに評価していることが窺える。

表5．ボランティアタイプによる援助経験評価の差異（t検定結果）

変数名	会員ボランティア（SD）		救援ボランティア（SD）		df	t
5年後満足度	3.05	(1.045)	2.50	(1.119)	263	3.98***
援助成果①	3.79	(0.962)	3.35	(0.730)	257	4.20***
援助成果②	3.27	(1.054)	2.87	(1.171)	260	2.78**
援助出逢い①	3.36	(1.186)	2.87	(1.246)	261	2.89**
援助成果合計	17.64	(3.800)	2.87	(4.230)	259	2.79**

注1）数値は、平均値と標準偏差
注2）有意水準は、** p<.01, *** p<.001
注3）援助成果①は、「被災者にとって役立つことができた」
援助成果②は、「自分自身を評価することかできた」
援助出逢い①は、「他のボランティアと良く交流できた」
援助成果合計は、援助成果の3項目と援助出逢いの2項目の計5項目を単純加算したもの

なお、t検定結果、有意でないことが示された変数があった。援助成果においては、援助成果③の「自分にとって得るものがあった」（会員m=4.162, 救援m=4.063)，援助成果出逢い②の「興味深い人々と出逢えた」（会員m=3.206, 救援m=3.051）の2項目である。活動のネガティブ側面を測る問題認識変数においては、「ストレス・葛藤を感じた」（会員m=2.369, 救援m=2.516）と「活動上の問題を認識した」（会員m=3.514, 救援m=3.622）の全項目である。これらの変数においては、ボランティアタイプによって評定に違いがあるとは言えない。つまり、ボランティアタイプに拘わらず、同様に評価するボランティア活動の側面があることが示唆されている。また、活動のネガティブ側面については統計的に差があるとは言えないが、僅かながら救援ボランティアの評定値が高い傾向にある。今後は

ネガティブな側面をより詳細に扱い、経験が豊富なボランティアと浅いボランティアとで活動のネガティブな側面をどのように捉え、どのように評定しているのか、その過程を詳しくみて明らかにする必要があるだろう。

４）援助活動経験の５年後の影響

援助活動経験の５年後の影響に関する各項目における、ボランティアタイプによる差異を、ｔ検定で確かめた。その結果、有意水準５％未満で差のあった項目は、ボランティア全般への「活動関心度」、活動参加意欲を測る「活動意欲度」、自由に時間があるときにボランティア活動をどの程度スケジュールに入れるのかを測る「余暇割当度」の３項目であった。表６に、検定結果を示す。

表６．ボランティアタイプによる援助活動経験の影響の差異（ｔ検定結果）

変数名	会員ボランティア（SD）		救援ボランティア（SD）		df	t
活動関心度	4.52	(0.63)	3.02	(0.62)	289	4.32***
活動意欲度	4.11	(0.89)	2.67	(0.62)	285	4.65***
余暇割当度	3.87	(0.74)	3.13	(1.09)	280	6.26***

注１）数値は、平均値と標準偏差
注２）有意水準は、*** p<.001

活動から５年後において、会員ボランティアは、救援ボランティアよりも、ボランティア活動へ一層強い関心を持ち、活動への参加意欲も高く、実際に余暇をボランティア活動に割り当てるというように、ボランティア活動への関与度が高いことが明らかとなった。

なお、「活動有意義性」（会員m=4.62, 救援m=4.54）と「活動参加による態度変化度」（会員m=3.80, 救援m=3.79）の２変数においては、ボランティアタイプによる評定差が示されなかった。災害ボランティア活動経験により有意義性評定や態度変化がボランティアタイプで違わないということは、このような大規模な災害へのボランティア活動は両タイプとも初めてであり、他のボランティアの経験度によってその評定が左右されないことが示唆された。

５）現在のボランティア活動への経験影響の差異（χ^2検定結果）

ボランティア活動経験の影響として、以後もボランティア活動に従事しているかどうかを、ボランティアタイプ別にクロス表として、表7に示した。これによると、会員ボランティアの参加率が74.8%と非常に高く、彼らが、救援ボランティアよりも、コンスタント

に活動を継続していることが分かる。χ^2検定の結果、有意な連関性が認められ（$\chi^2(1)=22.53, p<.001$）、会員ボランティアが救援ボランティアよりも活動していることが示された。なお、活動に初めて参加することの多かった救援ボランティアにおいても、その50%近くが、以後何らかの活動に従事したことがあり、活動経験の影響が大きく、しかもそれが持続することに注目すべきであろう。

表7．ボランティアタイプ別のボランティア活動経験の有無（人数と割合）

	参加している	参加していない	不明	合計
全体	179	87	38	304
%	58.9	28.6	12.5	100.0
救援	87	74	20	181
%	48.1	40.9	11.4	100.0
会員	92	13	18	123
%	74.8	10.6	14.6	100.0

以上のボランティアタイプによる差異の検定結果から、会員ボランティアと救援ボランティアとでは、その活動参加の経緯、活動の評価、活動の影響の異なることが明らかとなった。

会員ボランティアは、救援ボランティアよりも、経験・パーソナリティによって自分は援助に向いていると認識し、活動要請があれば応じる傾向にあり、コストが高くとも自分の活動をポジティブに捉え、その影響としてボランティア活動全般の評定もポジティブに行う傾向にあると言えよう。これは、会員ボランティアが震災前の活動経験から、自己を活動に向いていると評定し、活動も実際に効果を上げ、一層満足し、その後も活動に対して積極的であるという好循環過程にあることが考えられる。これは、高木（1997）のモデルで指摘された良い活動経験がもたらす影響過程にあてはまると言えよう。

また、ボランティアタイプにより差がないものもあり、それらは活動のネガティブ側面の評定とその有意義性の評定、活動によるボランティア活動への態度変化である。我が国では初めての大規模な震災活動のために、ボランティアタイプによる差がないのか，また、有意義性評定はボランティア活動を行うかどうかを決定する要因としてあるために差が出てこないのか、活動のネガティブな側面はボランティア活動とどのような関わりがあるのかなどを今後深く探り、明らかにしてゆく必要があるだろう。

３．ボランティアタイプと地震関与度による活動参加動機の差異（２要因分散分析結果）

高木・玉木(1996)のボランティア活動参加動機の分析で得られた下位尺度に沿い、各動機得点がボランティアのタイプ(会員/救援)と地震の関与度(地震の体験度，被害度，被災者知人の有無の３項目をそれぞれZ得点化し、単純加算し、中央値でH群とL群とに分割)とによって異なるかどうかを見るために２要因の分散分析を行った。その結果、有意な主効果がみられたのは、第１動機、第２動機、第４動機、第５動機においてであった。そこで、有意差がみられた結果について、高木・玉木(1996)の結果と比較しながら、検討を行う。

１)「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機の差異

この動機は、「被災者が気の毒に思えたので」、「自分が援助しなければならないと感じたから」などの最も活動参加に影響していた動機項目を７つ含んでいる。この下位尺度が示すのは、被災者に共感し、援助の責任を自分が受容したために活動に参加するという動機である。ボランティアタイプ(2)×地震関与度(2)の２要因配置分散分析の結果（表８)、ボランティアタイプの主効果の傾向のみが認められた（$F(1/298)=2.73, p<.10$)。

表８．「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機についての分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	
ボランティア（会員/救援）	77.44	1	77.44	2.73†	会員>救援
関与度（H/L）	4.71	1	4.71	0.68	
誤差	8447.5	298	28.35		
全体	8529.7	300			

注１）有意水準は、† $p<.10$

会員ボランティア（m=22.19）の方が、救援ボランティア（m=21.15）よりも、この動機に基づいて参加する傾向があるというのである。高木・玉木（1996）においても、同様の分析を行なっている。その結果では、ボランティアタイプの主効果のみが見られ($F(1/198)=4.86, p<.05$)、同様に会員ボランティアの方が救援ボランティアよりも、この動機に基づいて参加していたことが明らかにされた。会員ボランティアは、ボランティア活動団体に以前から所属し、種々の活動に係わってきたことから、特に「自分が援助しなければならない」と責任を強く感じて、活動に参加したと考えられる。

２)「好ましい援助、被援助経験」動機の差異

この動機は、「以前にこのような援助をして良い気持ちになった経験があったので」、

「今までに誰かに援助されて助かった経験があったので」などの援助・被援助経験に基づき活動参加することを意味する。この動機について2要因配置分散分析を行った結果（表9）、0.1%水準でボランティアタイプの主効果が見られた（F(1/298)=42.91, p<.001）。つまり、会員ボランティア（m=7.40）の方が救援ボランティア（m=5.26）よりも、この動機に基づいて参加していた。

高木・玉木（1996）においても同様の分析を行っている。その結果は、同じく、ボランティアタイプの主効果のみが見られた（F(1/192)=12.98, p<.001）。なお、この動機は、評定平均値からすると、活動参加の動機にあまりならない（m=6.13）。なぜならば、3項目の合計で6点以下の者が228人おり、全体の75.0%が「あてはまらない」あるいは「あまりあてはまらない」を選び、「あてはまる」あるいは「ややあはまる」としている人は僅かに15人で、全体の4.9%である。このことは、この動機が全般に活動参加動機になりにくいが、特に救援ボランティアでは援助経験あるいは被援助経験という実際の体験に基づいての参加が、会員ボランティアと比較して少ないことを意味している。

表9.「好ましい援助、被援助経験」動機についての分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	
ボランティア（会員/救援）	334.29	1	334.29	42.91***	会員>救援
関与度（H/L）	15.77	1	15.77	2.02	
誤差	2321.6	298	7.79		
全体	2671.7	300			

注1）有意水準は、*** p<.001

3）「被災地や被災者への好意的態度」動機の差異

この動機は、「被災地の神戸やそこに住んでいる被災者たちが好きだから」などの2項目で構成されている。この動機について、ボランティアタイプと地震関与度との2要因配置分散分析を行った結果（表10）、地震関与度の主効果の傾向が認められた（F(1/298)=2.84, p<.10）。つまり、地震関与度の低い群（m=2.61）の方が高い群（m=2.40）よりも、比較的この動機に基づいて活動参加する傾向があるようである。つまり、地震の関与度の低い群の方が、被害のある阪神・淡路地域への好意を活動参加のきっかけにしやすかったのである。

高木・玉木（1996）でも同様に2要因配置分散分析を行っている。その結果、今回と同様の地震関与度の主効果（F(1/192)=6.14, p<.05）に加えて、ボランティアタイプの主効果も認められ（F(1/192)=4.41, p<.05）、救援ボランティアの方が会員ボランティアよりも、

被害のある阪神・淡路地域への好意を活動参加のきっかけにしやすかったのである。

表10.「被災地や被災者への好意的態度」動機についての分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	
ボランティア（会員/救援）	3.90	1	3.90	0.61	
関与度（H/L）	18.20	1	18.20	2.84†	低関与>高関与
誤差	1912.7	298	6.42		
全体	1934.8	300			

注１）有意水準は、† p<.10

４）「援助要請への応諾」動機の差異

この動機は、「援助するよう直接誰かに頼まれたので」などの３項目からなる。この動機について、ボランティアタイプと地震関与度の２×２の２要因配置分散分析を行った結果（表11）、ボランティアタイプにおいてのみ主効果の傾向が見られた（F(1/298)=3.86, p<.10)。つまり、会員ボランティア（m=6.47）の方が救援ボランティア（m=5.84）よりも、この動機に基づいて活動参加する傾向のあることが示された。会員ボランティアにおいては、やはり、ボランティア団体による要請があり、それに応える形での参加が多いということであろう。

高木・玉木（1996）でも、この動機において、ボランティアタイプの主効果が認められており（F(1/190)=9.86, p<.01)、同様に、会員ボランティアの方が、この動機に基づいて活動に参加したようである。

表11.「援助要請への応諾」動機についての分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F	
ボランティア（会員/救援）	28.41	1	28.41	3.86†	会員>救援
関与度（H/L）	0.66	1	0.66	0.09	
誤差	2195.13	298	7.37		
全体	2224.21	300			

注１）有意水準は、† p<.10

以上のように、それぞれの動機についての分散分析結果は、高木・玉木（1996）のそれとよく類似していた。また、高木・玉木（1996）では、「自分が被災地の近くに住んでいるので」などの２項目から構成される第7番目の動機「被災地との近接性」においても、ボランティアタイプの主効果が認められていた（F(1/192)=7.91, p<.01)。さらに、既述のように第4番目の動機「被災地や被災者への好意的態度」においても、ボランティアタイ

プの主効果が認められていた。このことは、ボランティアタイプによる違いが、1996年と今回とで若干異なり、緩やかになったことを示唆している。

また、この2回の分析を通じて、会員ボランティアの特徴として、救援ボランティアと比して、自分に援助する能力を認め、援助する責任を受容し、援助経験に基づき援助への要請に応諾する形でボランティア活動に参加していたことが明らかになった。

また、地震の関与度で活動への参加動機が異なり、地震への関与度がむしろ低い人の方が、被災地や被災者に対する一般的な好意で活動に参加しようとする傾向のあることが認められた。

4．災害時における援助活動参加からその影響の出現に至るまでの流れ（パス解析）

高木・玉木（1996）による援助活動への参加から影響が現れるまでの過程モデルに沿い、パス解析によって、その流れを検証する。

1）援助実行の意思決定過程

①活動参加動機の規定因

援助実行の意思決定過程として、7つの動機尺度得点のそれぞれを目的変数とし、ボランティアタイプ（会員=1/救援=0）、ボランティア経験度、地震関与度を説明変数とした重回帰分析を行なった。

その結果（表12）、3つの説明変数は、活動参加動機の第2動機「好ましい援助、被援助経験」（Adjusted R^2=.145, p<.001）と第4動機「被災地や被災者への好意的態度」（Adjusted R^2=.024, p<.05）において、有意な説明力をもち、残りの5つの動機においては、弱い説明力しかもたないことが示された。

会員ボランティアであり（β=.271, p<.01）、ボランティア経験が豊富な人（β=.173, p<.001）では、「以前にこのような経験をして良い気持ちになったから」、「今までに誰かに援助されて助かった経験があったので」という「好ましい援助、被援助経験」が活動参加動機になるようである。これは、この動機尺度の妥当性を示すものであり、援助に伴う良い感情経験が次の援助活動を導くことを示唆している。また、地震関与度の低い人（β=-.167, p<.01）では、「被災地や被災者への好意的態度」が活動参加動機になるようである。これは、上記の分散分析結果と同じように、地震関与度の低い人は、被災地や被災者への好意に基づき援助活動に参加することを示唆している。しかしながら、このような好意は

表12. 援助実行の意思決定過程における７つの活動参加動機を規定する要因

説明＼目的	動機①	動機②	動機③	動機④	動機⑤	動機⑥	動機⑦
ボランティア（会員/救援）		.271**			.149*		
地震関与度				-.167**			
ボランティア経験		.173***					
Adjusted R^2	.001	.145***	.003	.024*	.009	.001	.004

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、* p<.05, ** p<.01 *** p<.001
注３）動機①は「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機
動機②は「好ましい援助，被援助経験」動機
動機③は「利得・損失計算」動機
動機④は「被災地や被災者への好意的態度」動機
動機⑤は「援助要請への応諾」動機
動機⑥は「良い気分の維持・発展」動機
動機⑦は「被災地との近接性」動機

何に基づくのであろうか。被災地への関与度であろうか、それとも被災地が元々もつ好イメージであろうか。神戸という街への憧憬などがあるのだとしたら、それが今回のボランティア求心力として働いたと言えよう。被災者や被災地への好意が何に基づくのかを明らかにすることが今後待たれる。

高木・玉木（1996）においても、活動参加動機を規定する要因について重回帰分析を行っており、上記2つの動機において、同様の結果を得ている。しかし、高木・玉木（1996）においては、参加決定情報がパーソナルメディアによるものかマスメディアによるものかという変数も投入しており、これが６つの動機において有意な説明率を得ていた。

②援助効果推定の規定因

参加以前に、自分がどの程度活動に役立つと推定していたのかを測る「援助効果推定」を目的変数にし、７つの活動参加動機得点，ボランティアタイプ，地震関与度，ボランティア経験度を説明変数として、変数増加法を用いた重回帰分析を行なった。その結果（表13)、援助効果推定を規定するのは、ボランティアタイプ、地震関与度、「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機、「利得・損失計算」動機であった（Adjusted R^2=.113, p<.001)。つまり、会員ボランティアで（β=.118, p<.10)、地震の関与度が低く（β=-.131, p<.05)、「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機を抱いて参加した人（β=.315, p<.01）ほど、自分の援助が役に立つであろうと推定していた。逆に、「利得・損失計算」動機に基づいて活動に参加した人（β=-.129, p<.05）ほど、自分の援助活動が役立つとは考えていなかったことが明らかになった。

会員ボランティアは、援助効果を高く期待し勝ちであるが、それは、このような災害ではボランティア団体に属し、日頃から活動しているボランティアが活躍することが自他ともに期待されるからであろう。阪神・淡路大地震に関与度が低く、その点において被災者に共感しにくい人でも、自分の援助が効果をあげると思うからこそ参加し、援助効果を高く見積もったと考えられる。また、「自分が援助しなければならないと感じたから」という「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機から参加する人は、自己効力感から援助効果を期待している。他方、「援助すれば何らかの報酬や返礼が期待できたので」や「援助しないためにこうむる犠牲が大きかったので」という「利得・損失計算」動機に基づき参加した人には、やはり自分にとって合理的な活動であるためか、自分の援助活動が被災者や被災地にとってはあまり効果がないと考えていたのだろう。

表13. 援助実行の意思決定過程における援助効果推定の規定因

説明＼目的	援助効果推定
ボランティア（会員/救援）	.118†
地震関与度	-.131*
ボランティア経験度	
「責任の受容」動機①	.315**
「援助経験」動機②	
「利得損失」動機③	-.129*
「好意的態度」動機④	
「要請応諾」動機⑤	
「良い気分」動機⑥	
「被災地近接」動機⑦	
Adjusted R^2	.113***

注1）数値は、標準偏回帰係数
注2）有意水準は、† p<.10, * p<.05, ** p<.01 *** p<.001
注3）動機①は「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機
動機②は「好ましい援助，被援助経験」動機
動機③は「利得・損失計算」動機
動機④は「被災地や被災者への好意的態度」動機
動機⑤は「援助要請への応諾」動機
動機⑥は「良い気分の維持・発展」動機
動機⑦は「被災地との近接性」動機

高木・玉木（1996）においても、本研究と同様に「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機から参加した人ほど、援助効果を高く推定していた（β=.40, p<.001）。しかし、その他の説明変数の有意な影響は異なり、援助効果の推定を規定していたものは、「好ましい援助、被援助経験」動機、「援助要請の応諾」動機、ボランティア経験度であっ

た。これらの規定因は、どれも援助経験からくる自己効力感と結びつきやすい変数であるが、本研究においてそれらの説明変数が有意な規定因として出てこなかった。その理由の一つとして、動機得点が因子得点ではなく簡便得点であったことも考えられるが、時の経過とともに、特に効果推定と関わる参加動機が変化する過程は今後の重要な課題となろう。

２）援助活動の評価過程

第２段階として、実際に行った援助活動の評価を行う段階が考えられる。

①援助効果度の規定因

まず、自分の行った援助活動がどのくらい効果があったと評価するのかという段階がある。その評価を規定する説明変数として、７つの活動参加動機と援助効果推定の計８個を増加法で投与し、重回帰分析を行った。その結果（表14）、援助効果の評定を規定していたのは、標準偏回帰値の高い順に挙げると、援助効果推定（β=.305, p<.001）、「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機（β=.200, p<.01）、「被災地や被災者への好意的態度」動機（β=-.103, p<.10）、「良い気分の維持・発展」動機（β=-.102）の４つであった（Adjusted R^2=.138, p<.001）。

表14. 援助活動評価過程における援助効果度の規定因

説明＼目的	援助効果
「責任の受容」動機①	.200**
「援助経験」動機②	
「利得損失」動機③	
「好意的態度」動機④	-.103†
「要請応諾」動機⑤	
「良い気分」動機⑥	-.102
「被災地近接」動機⑦	
援助効果推定	.305***
Adjusted R^2	.138***

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、† p<.10, ** p<.01, *** p<.001
注３）動機①は「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機
動機②は「好ましい援助，被援助経験」動機
動機③は「利得・損失計算」動機
動機④は「被災地や被災者への好意的態度」動機
動機⑤は「援助要請への応諾」動機
動機⑥は「良い気分の維持・発展」動機
動機⑦は「被災地との近接性」動機

自分の援助活動が被災者に役立ったと評価する人は、自分の援助は役に立つと参加前に推定しており、自分は愛他的で援助能力もあるから援助活動に参加するのだと考えた人であり、被災地や被災者に好意をもっているからとか、気分が良かったから参加した人ではない。

自分には援助能力があるから活動に参加し、効果を上げることが出来ると予測した人が、実際の自分の援助活動が有効であったと評価することは、彼らの自己効力感が実際の活動に影響を与えていることを示唆している。これは、自己成就予言効果であろう。また、傾向ではあるが、被災者や被災地へ好意をもっているから、気分が良いから、という理由で援助活動に参加した人は、被災者のニーズに沿った活動を行えなかったという意識をもっていることが示された。これらの動機で参加した人は、被災地や被災者に一般的イメージを抱いているために、個別への有効な援助ができなかったのかもしれないし、あるいは援助場面がイメージと異なるために状況把握に時間をかけてしまい対応が遅れたのかもしれない。地震の関与度の低い人ほど被災地への好意的態度でもって活動に参加することが前分析の結果（表12参照）で示されていたことから、実際の援助場面との認識にズレがあり、そのために有効な援助ができなかったとも考えられる。

表15. 援助活動評価過程における目標実現度の規定因

説明＼目的	目標実現度
「責任の受容」動機①	
「援助経験」動機②	
「利得損失」動機③	
「好意的態度」動機④	
「要請応諾」動機⑤	
「良い気分」動機⑥	
「被災地近接」動機⑦	
援助効果	.513***
Adjusted R^2	.296***

注1）数値は、標準偏回帰係数
注2）有意水準は、*** p<.001
注3）動機①は「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機
動機②は「好ましい援助，被援助経験」動機
動機③は「利得・損失計算」動機
動機④は「被災地や被災者への好意的態度」動機
動機⑤は「援助要請への応諾」動機
動機⑥は「良い気分の維持・発展」動機
動機⑦は「被災地との近接性」動機

②目標実現度の規定因

どの程度自分のしたいと思っていたことが実現出来たかの、つまり目標実現度を目的変数とし、７つの援助活動参加動機と援助効果度の計8個を説明変数とし、変数増加法の重回帰分析を行なった。その結果（表15)、目標実現度を規定するのは、援助効果（β=513, p<.001）のみであった（Adjusted R^2=.296, p<.001)。つまり、援助効果を上げていると感じている人は、目標を実現していると感じているということであり、ボランティア活動参加者は目標として被災者に役立つことをあげていることが示唆された。

高木・玉木（1996）でも同様の結果が得られており、ボランティアのしたいことは５年経った今でも、被災者の役に立つことであると認識していることが示された。

③当時の活動満足度の規定因

つぎに、活動当時、自分の援助活動にどの程度満足していたかをきいた活動当時の満足度を目的変数にし、７つの援助活動参加動機、援助効果、目標実現度、援助活動により自分に得るものがあったとする援助成果、活動により人との出逢いがあったとする成果（出逢い)、活動上問題があったとする問題認識度、活動することに物理的負担があったとする物理的コスト、また、精神的に負担があったとする精神的コストの計14個を説明変数とし、変数増加法で重回帰分析を行なった。その結果（表16)、標準偏回帰係数の高い順に挙げると、当時の活動満足度を規定しているのは、目標実現度（β=382, p<.001)、物理的コスト（β=274, p<.001)、援助成果（β=270, p<.001)、「利得・損失計算」動機（β=.081, p<.10）の4つであった（Adjusted R^2=.469, p<.001)。

自分の活動に満足している人は、活動をする上で物理的コストがあるが、自分のしたいことができていて、活動を通じて自分にも得るものがあったと感じている人であり、また、損得を計算して有利と判断したことが参加理由となっている人であることが示された。活動目標の実現が満足感を与えること、活動により得るものがあったと感じることが満足感を与えていることは、納得のいくことである。また、物理的コストを感じているほうが満足感があるというのも、「苦労した甲斐があった」という意味でより満足が大きいのであろう。

高木・玉木（1996）においても、同様の結果を得ており、物理的コストが活動への貢献感を高め、満足感をもたらすのであろう。また、傾向ではあるが、「援助すれば何らかの報酬や返礼が期待できたから」や「援助しないために自分がこうむる犠牲が大きかったので」という「利得・損失計算」動機から活動に参加していることが満足感を高めている。

表16. 援助活動評価過程における当時の活動満足度の規定因

説明＼目的	当時の活動満足度
「責任の受容」動機①	
「援助経験」動機②	
「利得損失」動機③	.081†
「好意的態度」動機④	
「要請応諾」動機⑤	
「良い気分」動機⑥	
「被災地近接」動機⑦	
援助効果	
目標実現度	.382***
援助成果	.270***
出逢い	
問題の認識度	
物理的コスト	.274***
精神的コスト	
Adjusted R^2	.469***

注1）数値は、標準偏回帰係数
注2）有意水準は、† p<.10, *** p<.001
注3）動機①は「共感と愛他的性格に基づく援助責任の受容」動機
動機②は「好ましい援助，被援助経験」動機
動機③は「利得・損失計算」動機
動機④は「被災地や被災者への好意的態度」動機
動機⑤は「援助要請への応諾」動機
動機⑥は「良い気分の維持・発展」動機
動機⑦は「被災地との近接性」動機

満足度を評価するときの情報としては、コストを感じていたことや自分に得るものがあったと思っていることなどがあり、利得・損失を計算していることが窺われる。合理的に自分に得であると計算した上で活動に参加したために、損得計算の合算である満足度評価に一層敏感になり、厳しい査定をしているのではないだろうか。

3）ボランティア活動に対する態度と意欲への影響過程

自分の行った活動に対しての評価が、活動から5年後の現時点のボランティア活動全般に対する態度や関心、意欲にどのような影響を与えているのかをみてゆく。

①5年後における活動満足度の規定因

最初に、自分が行った活動についての現時点（調査時点：2000年2月～5月）における満足度評定を目的変数とし、援助効果、目標実現度、援助成果、出逢い、問題の認識度、

表17．ボランティア態度と意欲への影響過程における5年後の活動満足度の規定因

説明＼目的	現在の活動満足度
援助効果	
目標実現度	.124*
援助成果	.207***
出逢い	
問題の認識度	
物理的コスト	.075†
精神的コスト	
当時の活動満足度	.556***
Adjusted R^2	.645***

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、† p<.10, * p<.05, *** p<.001

物理的コスト、精神的コスト、当時の活動満足度の計８つを説明変数にし、変数増加法で重回帰分析を行なった。その結果（表17）、標準偏回帰係数の高い順に挙げると、５年後の活動に対する満足度を規定するものは、当時の活動満足度（β=.556, p<.001）、活動成果（β=.207, p<.001）、目標実現度（β=.124, p<.001）、物理的コスト（β=.075, p<.10）であった（Adjusted R^2=.645, p<.001）。当時の活動満足度を規定していたものとあまり変わらないが、やはり当時の活動満足度が高ければ、５年後の満足度も高いことが示されている。

高木・玉木（1996）では、半年後の活動についての満足度を規定する要因として、援助効果、活動日数、援助成果（認識の変化）、援助成果（自己変革）、物理的コスト数、活動上の問題数、活動終了理由（被災者のためか自分のためかのダミー変数）、当時の活動満足度の計７変数を取り上げ、重回帰分析を行なっている。その結果、当時の活動満足度（β=.59, p<.001）のみが半年後の活動満足度を規定していた（Adjusted R^2=.30, p<.001）。しかし、５年後の現在においては、活動について理性的な回顧・評価が行われ、論理的一貫化のために活動満足を規定する要因が増えたのかもしれない。

②災害ボランティアの有意義性認識度の規定因

つぎに、災害ボランティアの有意義性認識度を目的変数にし、援助効果、目標実現度、援助成果、出逢い、問題の認識度、物理的コスト、精神的コスト、５年後の満足度、ボランティアに参加することは自分にとって得るものがあるというボランティア全般に関する参加成果、参加することは道徳的に正しいという参加道徳性の計10変数を説明変数とし、変数増加法を用いた重回帰分析を行なった。その結果（表18）、災害ボランティアの有意

義性認識を規定するものは、標準偏回帰係数の高い順に、精神的コスト（β=-.258, p<.001）、物理的コスト（β=.219, p<.01）、参加道徳性（β=.217, p<.01）の3つであった（Adjusted R^2=.097, p<.001）。つまり、災害ボランティアを有意義なことと認識している人は、活動において金銭や体力的に負担を感じているが、精神的には負担を感じていないで、そしてボランティア活動に参加することは道徳的に正しいことと考えている人であることが示された。なお、精神的コストと物理的コスト間の相関係数はr=.580と高く、多重共線性の恐れはあるが、分析上歪みはみられないため、そのまま結果として用いた。物理的コストと精神的コストとで、有意義性認識度への影響の仕方が異なることが浮き彫りにされた。負担というネガティブな要素ではあるが、物理的負担があることは直接的にボランティア観にネガティブな影響を与えず、むしろポジティブに作用する。しかし、精神的負担はネガティブに作用するのである。

表18. ボランティア態度と意欲への影響過程における有意義性認識度の規定因

説明＼目的	有意義性認識度
援助効果	
目標実現度	
援助成果	
出逢い	
問題の認識度	
物理的コスト	.219**
精神的コスト	-.258***
5年後の満足度	
参加成果	
参加道徳性	.217***
Adjusted R^2	.099***

注1）数値は、標準偏回帰係数
注2）有意水準は、** p<.01, *** p<.001

高木・玉木（1996）においても、半年後の災害ボランティアの有意義性認識に経験がどのような影響を与えるかをみるために、変数増減法を用いた重回帰分析を行っている。説明変数は、援助効果、活動日数、社会や自己に関する認識が変化したという援助成果（有=1/無=0のダミー変数）、自己鍛錬になったという援助成果（有=1/無=0のダミー変数）、援助コスト数、援助終了理由、現在（半年後）の満足度、活動前に認識していた災害ボランティアの有意義性の8変数である。その結果、最も影響を及ぼすものは、認識変化の援助成果（β=.65, p<.05）であり、次いで5年後の満足度（β=.39, p<.10）、活動前の有意義性

認識度（β=.28, p<.05）が影響していた（Adjusted R^2=.35, p<.05）。本研究の分析では投与していない変数もあるが、活動から５年後の有意義性認識に影響する変数が異なっている。５年後において影響するものは、活動への満足度でもなく、日頃から抱いているボランティア活動の参加道徳性認識、そして半年後には影響がみられなかった実際の活動への負担経験である。この変化は、活動終了半年後にはまだ、災害ボランティア活動という非日常的な経験が鮮烈に思い出され、その活動の満足感や活動で得られた経験からボランティアの有意義性を強く感じていたのだが、５年という月日がその感動を薄れさせ、より一般的な道徳観と類似し、その判断材料として満足感や自己成果というポジティブな要素ではなく、ネガティブな要素のコストを重視するようになっているようである。

③ボランティア活動全般への参加態度の規定因

ボランティア活動参加にどの程度積極的かをみるために、「私はボランティア活動に参加することが好きである」という参加態度項目を設けた。参加態度を規定する要因を見極めるために、これを目的変数に、援助効果、援助成果、出逢い、問題認識度、精神的コスト、活動の満足度、有意義性認識度の計７つを説明変数にした、変数増減法による重回帰分析を行なった。その結果（表19）、ボランティア活動参加態度を規定するものは、標準偏回帰係数の高い順に、援助成果（β=.251, p<.001）、出逢い（β=-.166, p<.01）、問題認識度（β=-.134, p<.05）、活動満足度（β=.108）であった（Adjusted R^2=.163, p<.001）。

表19. ボランティア態度と意欲への影響過程における参加態度の規定因

説明＼目的	参加態度
援助効果	
援助成果	.251***
出逢い	-.166**
問題の認識度	-.134*
精神的コスト	
5年後の満足度	.108
有意義性認識度	
Adjusted R^2	.163***

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

つまり、活動を通じて、人との出逢いではないが、自己に何らかの成果があったと感じること、活動上に何らの問題も認識しなかったこと、活動に満足していることが、ボラン

ティア活動に参加することが好きだという認識をもたらすのである。成果として同列に位置づけられる「援助成果」と「出逢い」が参加態度に逆方向に影響している。活動に参加することで自分が人間的に成長すると、その場を提供する活動を好きだと思う。しかし、出逢いの場としてボランティア活動を位置づけるのであれば、逆に好きではなくなるというのである。成果に着目して活動を捉えれば、自然にボランティア活動自体は目的ではなく、成果のための手段と認識される。特に出逢いのための場として捉えたとき、活動は手段と置き換えやすく、傾倒しづらいことが推察される。参加態度に強く影響を与えるのは、活動成果と活動上の問題認識度と活動自体の評価というよりも、副次的な評価であり、活動満足度という活動自体の評価は弱く影響している。参加態度の変数は半年後の調査には含まれておらず、時間による影響比較はできない。しかし、有意義性認識度の影響の違いから、副次的な評価が指向に強く影響を及ぼすというのは、5年という時間が関係している可能性がある。

④ボランティア活動全般への関心度の規定因

ボランティア活動全般への関心が経験によって影響されているかどうかをみるために、活動への関心度を目的変数とし、援助効果、援助成果、出逢い、問題の認識度、精神的コスト、5年後の満足度、参加態度、参加成果、ボランティア活動に参加することを周りの人が期待しているかを測る周囲の参加期待、いつでもボランティア活動に私は参加できるという参加可能性、参加道徳性、活動への参加態度が経験によってプラスあるいはマイナスに変化したかを測定した参加好意度の変化、災害ボランティアの有意義性認識度の計13変数を説明変数とし、変数増減法を用いた重回帰分析を行なった。その結果（表20）、ボランティア活動全般への関心度を規定するのは、標準偏回帰係数の高い順に、参加態度（β=.337, p<.001）、参加可能性（β=.177, p<.01）、援助効果（β=.163, p<.01）、有意義性認識度（β=.134, p<.05）、周囲の参加期待（β=.114, p<.10）であった（Adjusted R^2=.301, p<.001）。つまり、ボランティア活動へ5年経った今でも関心を持っていることに影響しているものは、参加することが好きであるということ、いつでも参加できるという認識、そして被災者に役立ったという認識、災害ボランティア活動は有意義であるという認識、そして周囲の参加期待であり、それらをより強く認識しているほど、関心度は強いということである。5年前の活動評価が直接影響しているのは、援助効果のみであり、被災者に役立ったという認識は自己のボランティアに関する自己効力感を高めるだろう。そして、自己効力感をより高めるための動機づけ（コンピテンス動機づけ）が働くために、参加態

度が高まり、ボランティア活動への関心が高められることが示唆された。

表20．ボランティア態度と意欲への影響過程における活動への関心度の規定因

説明＼目的	活動への関心度
援助効果	.163**
援助成果	
出逢い	
問題の認識度	
精神的コスト	
５年後の満足度	
参加態度	.337***
参加成果	
周囲の参加期待	.114 †
参加可能性	.177**
参加道徳性	
参加好意度変化	
有意義性認識度	.134*
Adjusted R^2	.301***

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

高木・玉木（1996）による活動半年後の研究では、活動への関心度を規定していたのは、災害ボランティアの有意義性認識度（β=.93, p<.001）、認識変化をもたらす援助成果（β=-.33, p<.05）、参加好意度の変化（β=.31, p<.001）であった（Adjusted R^2=.32, p<.001）。関心度に影響を与える要因は、あまり違わず、災害ボランティア活動の有意義性認識や活動に参加することが好きであることと言えそうである。

⑤ボランティア活動への参加意欲度の規定因

ボランティア活動にどの程度参加する意欲があるのかを測定した参加意欲を規定するのはどのような変数だろうか。参加意欲の規定因をみるために、援助効果、援助成果、出逢い、問題の認識度、精神的コスト、５年後の満足度、参加態度、参加成果、周囲の参加期待、参加可能性、有意義性認識度、参加好意度変化、関心度の計14変数を説明変数にし、変数増減法を用いた重回帰分析を行った。その結果（表21）、参加意欲度を規定するものは、標準偏回帰係数の高い順に、関心度（β=381, p<.001）、周囲の参加期待（β=.151,

p<.01)、参加可能性（β=.118, p<.05)、出逢い（β=-.111, p<.05)、参加態度（β=.111, p<.10）であった（Adjusted R^2=.097, p<.001)。つまり、関心度が高いこと、周囲が活動参加を望んでいると強く認識していること、いつでも参加することができると認識していること、活動により人との出逢いがあったとあまり認識していないこと、参加することが好きなことなどが、参加意欲を高めていることが示された。

高木・玉木（1996）で半年後の参加意欲度を規定していたものは、災害ボランティアの有意義性認識度（β=.75, p<.001）と援助効果（β=.46, p<.001）であり、修正済み決定係数もAdjusted R^2=.70と非常に高い値を示していた。参加意欲尺度は本調査と同じものであり、説明変数として投入したものも僅かな違いしかないことから、この違いは5年の年月が経過したことによるものと思われる。活動から半年後では自分の援助効果評価は高く、災害ボランティアの有意義性をより強く認識し、活動への参加意欲を高めていたのに対し、5年後においては、活動への関心度やボランティアへの一般的参加態度や可能性などがそれぞれ弱いながらも影響し、現在の活動参加意欲を規定しているのである。この影響の仕方は、Harrison（1995）の提唱した影響の流れと非常によく類似しており、半年後が災害ボランティア活動の経験を強く受けていたのに対し、5年後にはその影響の仕方が異なり、より自己の生活と密着した要因が参加意欲に影響するようになっている。

表21．ボランティア態度と意欲への影響過程における活動意欲度の規定因

説明＼目的	活動意欲度
援助効果	
援助成果	
出逢い	-.111*
問題の認識度	
精神的コスト	
5年後の満足度	
参加態度	.111†
参加成果	
周囲の参加期待	.151**
参加可能性	.118*
参加道徳性	
有意義性認識度	
参加好意度変化	
関心度	.381***
Adjusted R^2	.407***

注1）数値は、標準偏回帰係数
注2）有意水準は、† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

⑥余暇活動割当度の規定因

ボランティア活動へ余暇の時間をどの程度割り当てようと思っているのだろうか。この余暇活動割当度を規定するものとして、現在の活動満足度、有意義性認識度、参加好意度変化、関心度、活動意欲度の計5変数を説明変数とし、変数増減法を用いた重回帰分析を行った。その結果（表22）、余暇活動割当度を規定するものは、標準偏回帰係数の高い順に、活動意欲（β=.284, p<.001）、関心度（β=.282, p<.001）、5年後の満足度（β=.112, p<.001）であった（Adjusted R^2=.296, p<.001）。つまり、活動意欲があり、関心度が高く、現在においても自己の災害ボランティア活動に満足しているほど、時間があればボランティア活動に積極的に参加しようという意欲を強くもっているということが示された。

表22. ボランティア態度と意欲への影響過程における余暇活動割当度の規定因

説明＼目的	余暇活動割当度
5年後の満足度	.112***
有意義性認識度	
活動好意度変化	
関心度	.282***
活動意欲度	.284***
Adjusted R^2	.296***

注１）数値は、標準偏回帰係数
注２）有意水準は、*** p<.001

４）影響の流れ：パス・ダイアグラム

以上の１）援助実行の意思決定過程，２）援助活動の評価過程，３）ボランティア態度と意欲への影響過程は、高木・玉木（1996）の提唱した「災害時における援助活動への参加からその経験の影響の出現に至るまでの過程」モデルに沿って分析したものであり、これらの流れをパス・ダイアグラムで示したのが図１である。

図１により大筋を追ってゆくと、会員ボランティアで、地震関与度が低い人ほど、「共感性と愛他的性格に基づく責任の受容」動機で活動に参加した人ほど、援助効果をより高く推定した人ほど、援助効果を実際に上げ、やりたいことができたと感じており、活動に満足していた。そして、当時活動に満足していた人ほど、５年経った現在でも自分の活動に満足しており、活動に対して一層積極的な態度を保持し、活動全般に対する関心も高く、ボランティア活動全般への参加意欲も高い。さらに、余暇にボランティア活動をする傾向も強くなる、ということである。

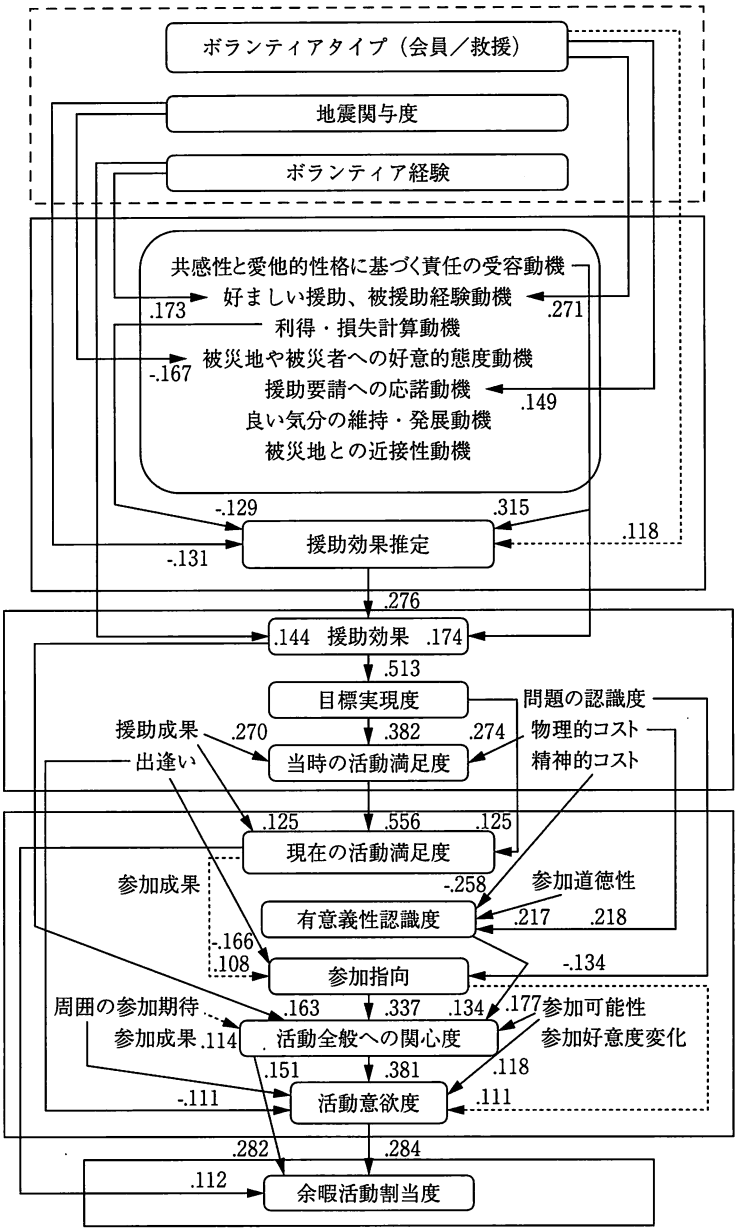

図１．援助活動への参加からその経験の影響の出現に至るまでの過程：パスダイアグラム

半年後のパス図と比較すると、１）援助実行の意思決定過程，２）援助活動の評価過程においては、ほぼ類似した経過を辿っているが、３）ボランティア態度と意欲への影響過程においては、その違いが見られた。

「ボランティア態度と意欲への影響過程」において、半年後のパス図では、半年後の活動についての満足度が災害ボランティアの有意義性認識度を高める傾向があった（β=.39, p<.10）。しかし、５年後においては、その影響がより弱くなっている（β=.108, p<.10）。また、援助効果はボランティア活動参加意欲を高めていたが（β=.46, p<.05）、５年後にはその影響が見られない。自己のボランティア活動についての認知・評価が5年後のボランティア全般に対する態度と参加意欲にもたらす影響は、半年後のそれと比して、弱くなっていると言えそうである。また、半年後，５年後共に災害ボランティアの有意義性認識度に規定されているボランティア活動への関心度は、半年後においては意欲に影響していなかったのに、５年後には活動意欲へ強い影響を及ぼしていた（β=.381, p<.001）。

これらのことから、ボランティア全般に対する態度と参加意欲への災害ボランティア活動の影響は、５年後において、半年後のそれとは異なり、災害ボランティア経験そのものからの影響よりも、周囲の参加期待や自分が参加できる状態にあるかどうかという現実場面の認知と合理的な計算に基づく有意義性認識や参加態度に影響される傾向にあると言えよう。

■全体のまとめ

本研究は、パス解析により以前のボランティア活動が５年後のボランティア活動に対する態度や意欲，参加にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした。パス解析からみられた結果をまとめると以下のようになる。特に、半年後の調査結果と比較し、５年後の影響に焦点を当ててみていく。

１．ｔ検定およびχ^2検定より明らかになったこと

ボランティアタイプによりその活動の動機，援助活動評価，ボランティア全般への態度と参加意欲がどのように異なるかをみた。その結果、会員ボランティアと救援ボランティアとで違いがみられた。例えば、会員ボランティアは、自己を援助に積極的で、愛他的であると認識して援助活動に参加し、また援助要請に応じる形で活動に参加することが示され、援助効果があると推定し、実際に活動は被災者に役立ち、コストもあったが自分に何らかの得るものがあったとも認知しており、救援ボランティアよりも満足感を得ていた。また、救援ボランティアよりも、その後のボランティア全般に対する態度や参加意欲が一層ポジティブであった。このことから、会員ボランティアは、ボランティアに良い自己評価を下し、活動自体についても良い評価を下していることが示された。これは、高木

(1997) の「援助者における援助経験の影響出現過程」における成功経験による影響過程と類似した過程を辿っていることを示唆している。

2．分散分析より明らかになったこと

ボランティアタイプと地震関与度というデモグラフィック要因とにより、どのように活動に参加する動機が異なるかをみた。その結果、会員ボランティアは、救援ボランティアよりも、援助経験や自己効力感に基づく動機から活動に参加していた。また、地震関与度の低い群は、被災地や被災者に好意的イメージを抱き、それに基づき活動に参加していた。ボランティア活動の好ましい経験がその効力感を高め、一層その後の活動を動機づけていることが示唆された。

3．パス解析により明らかになったこと

1）援助実行の意思決定過程

パス解析により明らかになったことは、分散分析結果をより詳しく説明するものであった。つまり、経験の豊富な会員ボランティアが好ましい援助経験に基づいて活動に参加し、自分の援助は効果を上げると考えていた。この過程は、半年後の調査（高木・玉木、1996）とほぼ同じであった。

2）援助活動の評価過程

自分の援助活動を評価する過程では、自己効力感により活動に参加した人ほど、自己の活動を高く評価し、活動に満足していた。また、物理的コストを抱えた人ほど活動に満足を感じており、コストを払った人が認知的不協和を低減するためにその活動に満足を感じ、コストを支払うのに値する十分な活動であったとしていることが窺える。この過程も、半年後の調査（高木・玉木、1996）とほぼ同様であった。

3）ボランティア活動に対する態度や意欲への影響過程

この過程では、半年後の調査（高木・玉木、1996）と異なる結果がみられた。

活動の満足度や有意義性認識度、参加態度に物理的コストが影響していた。これらの項目を評定する際に、何らかの損得計算を行っており、5年経つと一層合理的に認知判断するようになっているようである。また、物理的コストと精神的コストの影響の仕方も異なり、物理的コストはボランティア活動への態度をポジティブな方向に強め、精神的コストは逆にネガティブな方向に強めていた。

そして、参加意欲というより活動参加に関わる変数においては、Harrison（1995）のモデルに類似した影響過程が認められた。つまり、災害ボランティア経験が直接、意欲に影響するのではなく、それが参加態度や参加可能性等に働き、間接的に影響してゆくようである。

また、Harrisonのモデルや高木（1997）の指摘にあるように、ボランティア活動に関する自己効力感という変数が活動の認知・評価から参加意欲や参加態度の媒介変数として存在していることが示唆された。高木・玉木（1996）の影響過程は、災害から時間が経過していない際のものとしては最適であるかもしれないが、５年後の影響過程としては、他の変数が介入していることが示唆される結果であった。今後は、非日常的な災害ボランティアがいかにボランティア全般の活動に根づいていくかを長い時間展望の中で示すモデルの設定が必要であろう。また、個人内の影響過程だけでなく、人から人へと影響してゆく過程も検討することが、日本におけるボランティア活動を根づかせるために必要であろう。

■参考文献

Aronson, E. 1992 *The social animal* (6th ed.) New York : W, H. Freeman and Company. 古畑和孝（監訳）1994 ザ・ソーシャル・アニマル：人間行動の社会心理学的研究（第６版）サイエンス社

Clary, E. G., & Snyder, M. 1991 A functional analysis of altruism and prosocial behavior:The case of volunteerism. *Review of Personality and Social Psychology*,12,119-148.

Harrison, A, D. 1995 Volunteer motivation and attendance decisions: Competitive theory testing in multiple sample from a homeless shelter. *Journal of Applied Psychology*,80, 371-385.

神戸新聞　1999　「震災ボランティアは今-神戸新聞アンケート調査から-」, http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/99sien/toku1.htm

工藤敬吉・杉本政治　1998　世論調査リポート「ボランティア像」大災害で変貌～“気軽型”から“献身型”へ～　「放送研究と調査」, 3月号, NHK放送文化研究所, 26-39.

高木　修　1997　援助行動の生起過程に関するモデルの提案　関西大学社会学部紀要, 29（1）, 29-60.

高木　修　1998　『人を助ける心：援助行動の社会心理学』　サイエンス社

高木　修・玉木和歌子　1995　阪神・淡路大震災におけるボランティアー避難所で活躍したボランティアの特徴－　関西大学社会学部紀要, 27（2）, 29-60.

高木　修・玉木和歌子　1996　阪神・淡路大震災におけるボランティアー災害ボランティアの活動とその経験の影響－　関西大学社会学部紀要, 28（1）, 1-62.

玉木和歌子　2000　ボランティア活動の動機と成果　高木　修（監）西川正之（編）『援助とサポートの社会心理学』（シリーズ21世紀の社会心理学第４巻）　北大路書房　82-93

玉木和歌子・高木　修　2000　ボランティア活動の影響過程に関する研究－Harrisonのモデルの検討－　日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 378-379.

謝辞：この調査を実施するにあたり、京都YMCAから絶大なる支援を得ました。また、長時間を要する調査票への回答に多数のみなさまから快い協力をいただきました。ここにそのことを記し、心より感謝申し上げます。

―― 2000.11.9 受稿 ――